

# 幼児教育研究部 第2回研修会 教諭班

## 講演会

講師 浜松学院大学短期大学部教授 志村 浩二 氏

演題 「落ち着きのない子どもたち・勉強の苦手な子どもたち」

ー発達のアンバランス：ADHD・LD・DCDの視点からー

### ○ 教師の適切な支援から築いた信頼関係により育まれる、将来における人格形成の基礎～適切な援助を行うために、どのような視点で子供の姿を読み取るとよいのか～

発達障がいとは、発達のアンバランスや状況理解が及ばないことで能力が発揮できず、生活や学習に困難が生じたり、二次的に不適応が起きたりする。教師が発達障がいを理解し適切な支援をすることで、子供との間に信頼関係が生まれる。小学校高学年くらいになり、自身が自分の特性が分かるようになると、幼児期に支援された経験が活かされ、自分で気を付けながら生活するようになり、その後の人生の生きやすさへとつながっていく。人格形成の基礎の時期に適切な支援をすることが必要である。

### ○ ADHD・学習障がいの特徴

#### 聴覚

- ・大事な音とそうでない音を選び分ける力が、生まれつき弱い子がいる。教師の問い掛けに対し、全く関係ないことを答える子には、なぜそのように答えたのか大事な音とそうでない音の捉え方を様々な角度から探ると理由が分かり、支援につなげやすい。
- ・教師が声を掛けても返事が返ってこない子は、雑音が耳に入り、必要なことを聞き分けられていないことがある。返事がなかったことを伝え、「先生はみんなには優しいのに、僕には怒る」と自分なりの捉え方をし、自身の評価を下げてしまう。その経験が積み重なると二次障害につながることもある。教師は子供の視界に入って声掛けをし、目（視覚）と耳（聴覚）から支援をすることが有効である。

#### 視覚

- ・選択的注意が苦手な子は、就学後に予定表が写せなかったり、違うところを見ていたりするなどの課題が出てくる。人間はコミュニケーションを取る時に自然と相手の顔を見ているように思えるが、実は注目する部分を選択して顔を見ている。一方で、活動中に動きを止めることが難しい子は、選択的注意ができず様々な物が目に入るため、集中時間は短い。この特性を理解し、興味があることを伸ばして自己肯定感を高めることが大切である。

#### 構成（身体機能）

- ・身体感覚がアンバランスな子供が増えている。原因の一つとしてスマートフォンの普及により、指先だけの動きが多く、身体を動かす経験の不足が挙げられる。身体や五感を使って育てていくことが身体機能の育ちにつながる。

### ○ 講話を受けて（自己課題や方策、今後の取組方について）

- ・生まれもった特性から困り感をもつ子は、自己肯定感が育みにくく、大人との信頼関係を築くために適切な支援を受けることが大切であることを学んだ。困った時に助けを求める力が育つために、子供との信頼関係を築き、大人から助けてもらえた経験を重ねながら、自己肯定感が高まるようにしていきたい。
- ・発達障がいの様々な表れは、特性をもつ子が意図して行っているのではない。適切な信頼関係を築くために、日々の保育でその子に合った支援を探り、実践し続けることの大切さを学んだ。今後は、子供の姿を多面的に読み取れるよう職員同士で共有し、支援の改善につなげていきたい。

